

パーリ語の指示詞 *idaṃ*, *etaṃ*, *aduṃ/amuṃ* の現場指示用法について

京都光華女子大学真宗文化研究所特別研究員

稲葉 維摩

1. はじめに

パーリ語は上座部仏教の文献を伝える古代インドの言語である¹。パーリ語の主な指示詞は *taṃ*, *idaṃ*, *etaṃ*, *aduṃ/amuṃ*, *naṃ* の5つである²（本論文では、中性・単数・主格／対格の形を代表形とする）。本論文はこの内の *idaṃ*, *etaṃ*, *aduṃ/amuṃ* の現場指示用法について論じる。現場指示とは、発話の場における物理的な事物や場所を指し示す使われ方である。

従来、この3つの指示詞が使い分けられる基準は距離の区別として考えられてきたと言える。しかし、実際にはそれぞれの指示詞の使用頻度にかかなりの差があり、区別しているはずの距離に合わないことが多い。指示詞の実態は辞書や文法書の記載よりも多様である。したがって、使われ方を調べ、指示詞の意味を見直す必要がある。

本論文は話し手・聞き手の相互行為に注目する近年の指示詞研究を参考にして、話し手・聞き手・指示対象の関係から *idaṃ*, *etaṃ*, *aduṃ/amuṃ* の使われ方を検討し、基本となる意味を考察する。これらの指示詞は距離でなく、指示対象が話し手あるいは話し手・聞き手と同一の場にあるかどうか、言い換えれば、指示対象が発話あるいは対話の場にあるかどうかによって区別されていると考えられる。この判断は話し手が行うもので、発話／対話の場にあると判断される対象に *idaṃ* が使われ、ないと判断される対象に *etaṃ* あるいは *aduṃ/amuṃ* が使われる。しかし、*aduṃ/amuṃ* は単独で現場指示に用いられること

がほとんどないため、*idaṃ* と *etaṃ* が主な対立関係にあると考えられる。

2. 本論文が扱うテキスト

仏教で最も基本的な文献は、ブツダや弟子たちの言行録である経、教団の規則である律、教義を体系化する論の3つである。これらは伝統的に三蔵と呼ばれる。パーリ語で伝わっているのは上座部の三蔵であり、他にも三蔵それぞれに対する注釈書や論の発展したもの、歴史書など数多くの文献がある。成立年代も大変幅広い。本論文では主に経を研究の範囲とする。経は物語の形式になっていて、規則や教義を述べる律・論よりも様々な場面が描かれており、表現が豊かだと言える。そのため、指示詞の多様な例文を集めることができる。

idaṃ と *etaṃ* は頻繁に使われる指示詞であるため、両者に関しては経の中心的な文献である *Dīghanikāya*, *Majjhimanikāya*, *Saṃyuttanikāya*, *Aṅguttaranikāya* の範囲で調べた（以下、それぞれの文献を D, M, S, A とする）。これらは基本的に散文で書かれている。この他、経には韻文で書かれた文献がある。韻文は韻律の制約や修辞によって、ことばが工夫されている。また、韻文の文献は、D, M, S, A よりも成立の年代にばらつきがあり、新旧の文献が混在している。本論文は指示詞の基本的な問題を調べるのが目的であるため、韻文としての制約がなく、また成立年代もほぼ変わらないと考えられる上述の文献を主な研究範囲とした。一方、*aduṃ/amuṃ* は先の2つに比べて、現場指示の例がほとんどない。そのため、検討の範囲を韻文文献と律にまで広げた³。

3. パーリ語の指示詞に関するこれまでの理解

パーリ語の指示詞の形態については、文法書の Geiger (1916), Hinüber (2001), Oberlies (2019) などによって、言語の歴史的な面とともに詳しく説明されている。本論文では、形態に関しては触れずに、指示詞の意味や使われ方がこれまでどう理解されてきたかを問題にする。

管見の限り、辞書や文法書の記載を除いて、パリー語の指示詞に関する研究はない。ここでは、辞書や文法書の記載を現場指示用法に限り確認しておく(以下、辞書の見出し語を括弧に入れた)。パリー語の詳細な辞書である CPD は、*idam* (s.v. *ayam*) を “this (here), just this, the present”、*etam* (s.v. *esa*) を “this, just this, this one (deictic, referring to things of proximity)”、*adum/amum* (s.v. *amu*) を “that (*ille*) opposed to *ayam*”⁴ とする。

新しい辞書の Cone (2001–2020) は少し文言を変えて、*idam* (s.v. *idam*) を “this (referring to what is immediately present [in space or in thought])”、*etam* (s.v. *eta* (*d*)) を “this (referring to what is nearest in space or in thought ; ...); often pointing out someone or something : here is ..., there is ...”、*adum/amum* (s.v. *asu*²) を “that (as opposed to *ayam*)” としている。*idam* と *etam* の項目に “in space or in thought” とあることから、空間に加えて、いわゆる心的な距離のようなものを考えているように見える。また、*etam* はしばしば指差しなどの動作を伴うとしている。文法書の Oberlies (2019) は CPD や Cone (2001–2020) を踏襲している。

以上のことから、これらの指示詞は距離の点で理解されてきたと言える。*idam* は現前・目下、*etam* は近接の意味を持ち、どちらにも *this* が当てられる。*adum/amum* は *idam* に対立する指示詞として *that* が当てられる⁵。

4. 従来の理解の問題点

さて、こうした従来の理解には問題がある。すなわち、先に見た辞書や文法書の説明から、テキストにおける様々な使われ方を総合的に把握することは難しいという問題である。まず、それぞれの指示詞の間で、使用される頻度が大きく異なる。*idam* と *etam* は頻繁に使われる。それに比べて、*adum/amum* はほとんど使われない。例えば、多くの物語が収録されている M の中で指示詞を数えると、*idam* の男性・単数・主格は 965 回、*etam* の男性・単数・主格は 196 回出現するのだが、*adum/amum* の男性・単数・主格はわずか 18 回しか現

れない⁶。性・数・格を問わずに *adum/amum* を数えても 136 回であり、*idam* と *etam* の男性・単数・主格に及ばない。頻度に大きな差があることから、距離が対称的に区別されているとは考えにくくなる。

これは同時に、距離に合わない使われ方があるということに関連している。テキストでは、それぞれの指示詞が区別しているはずの意味に合わない使われ方が多い。このことは、いくつかの使われ方を比較してみるとよくわかる⁷。

(1) は、話し手が祭火をおこすための道具を並べて、聞き手である弟子に教える場面である。(2) は客を席に招く場面である。どちらも *idam* が使われているが、典型的な近称の指示詞の使われ方に見える。このように使われる *idam* はテキストに多く、その限りでは現前・目下の意味が合いそうである。

(1) D II 340 *sace va te aggi nibbāyeyya, ayam vāsī, imāni katthāni, idam aranisahitam, aggim nibbattetvā aggim paricareyyāsī ti.*

もしお前のせいで祭火が消えたら—*idam* がなただ、*idam* が薪だ、*idam* が火きり棒一組だ—祭火をおこして、祭火を世話するように。

(2) M I 514 *nisīdatu bhavaṃ ānando, idam āsanaṃ paññattan ti.*

アーナンダ様はどうぞ、*idam* 用意されてある席にお座りください。

次に *etam* を見てみよう。(3) は、大勢の人々がブツダとの面会を待っている場面である。この人々について 2 人の比丘が会話をするのだが、話し手は人々を *etam* で指す。この時、人々は *idha* に集まっていると言われる。*idha* は *idam* の場所の副詞である。指示対象の人々は話し手の近くにいると考えていい。(4) は、(18) にも登場する殺人鬼アングリマーラが出家した後の場面である。話し手であるブツダは *etam* を使って聞き手にアングリマーラを指し示す。アングリマーラはブツダの「近くに (*avidüre*)」いる。いずれの指示対象も話し手に近いと言えるため、*etam* の使われ方は近接の意味に合うように見える。

(3) D I 151 **ete** bhante kassapa sambahulā kosalakā ca brāhmaṇadūtā māgadhakā ca brāhmaṇadūtā **idh'** upasaṃkantā bhagavantam dassanāya. oṭṭhaddho pi licchavi mahatiyā licchaviparisāya saddhīm **idh'** upasaṃkanto bhagavantam dassanāya. sādhu bhante kassapa labhatam **esā** janatā dassanāyā ti.

尊き君カッサパよ、**etaṃ** 大勢のコーサラ国に住むブラーフマナの使者たちとマガダ国に住むブラーフマナの使者たちが世尊に会うため、**idha** に来ています。リッチャヴィ族のオッタダも大勢のリッチャヴィ族の団体とともに、世尊に会うため、**idha** に来ています。尊き君カッサパよ、どうぞ、**etaṃ** 人々が面会を認められますように。

(4) M II 101 tena kho pana samayena āyasmā aṅgulimālo bhagavato **avidūre** nisinno hoti. atha kho bhagavā dakkhiṇabāham paggahetvā rājānam pasenadiṃ kosalam etad avoca : **eso**, mahārāja, aṅgulimālo ti.

一方その時、長寿なる者アングリマーラは世尊の近くに (**avidūre**) 座っていた。その時、世尊は右腕を伸ばしてコーサラ国王パセーナディに次のことを言った。「大王よ、**etaṃ** がアングリマーラです」。

ところが指示詞の体系を考えると、従来の理解に疑問が生じる。例えば (3) は **idha** に集まっている人々が指示対象なのだから、現前・目下と考えてもよさそうである。どうして **idaṃ** ではなく、**etaṃ** が使われるのだろうか。つまり、**idaṃ** と **etaṃ** の違いは何かという問題である。この問題は指示詞の使われる様々な場面で生じる。

さらに、どれが遠いものを指す指示詞なのかを考えてみたい。辞書や文法書には遠称とされる指示詞が見当たらないのだが、**idaṃ** と対立すると言われる **adum/amuṃ** が遠称の指示詞と考えられるかもしれない。ところが、第6章で見るように、近いと考えにくい対象や「遠くから (**dūrato**)」やって来る人物などに **idaṃ** か **etaṃ** が使われる。例えば (6) では集落や町の「近くに (**avidūre**)」ある穀物の山に **adum/amuṃ** が使われるのだが、これを「遠くから

(dūrato)」 やって来る人物を指す *idaṃ, etaṃ* (例文 (14), (18)) と比べるならば、*idaṃ, etaṃ* の方がむしろ遠いものを指していることになる。だが、そもそも *idaṃ* は現前・目下、*etaṃ* は近接の意味ではなかったか。どうして遠いものを指すのか、従来の理解のままでは説明できない問題と言えよう。

Cone (2001-2020) が *idaṃ* と *etaṃ* に加える心的な距離は、このような空間的な距離に合わない使われ方を説明するためのものかもしれない。しかしながら、心的な距離のような基準を導入するためには、それ相応の検証や議論が必要である。したがって、従来の *idaṃ, etaṃ* に対する理解は、多様な使われ方の一面にしか当てはまらないものだと考えねばならない。

それでは、*aduṃ/amuṃ* が *idaṃ* と対立すると言われるのはどういうことなのだろうか。確かにこの指示詞は、*idaṃ* とともに使われることがしばしばある。例えば、(5), (6) は2つの指示対象の内、一方を *idaṃ* で、他方を *aduṃ/amuṃ* で指している。(5) では *idaṃ* と *aduṃ/amuṃ* それぞれに属する場所の副詞 *ito* と *amutra* も対照的に使われている。

(5) D I 4 *pisuṇāvācaṃ pahāya pisuṇāya vācāya paṭivirato samaṇo gotamo, ito sutvā na amutra akkhātā imesaṃ bhedāya, amutra vā sutvā na imesaṃ akkhātā amūsaṃ bhedāya.*

沙門ゴータマは離間のことばを捨て、離間のことばを止めている。*idaṃ* の分裂のために、*ito* で聞いて、*amutra* で話す人でなく、あるいは *aduṃ/amuṃ* の分裂のために、*amutra* で聞いて *idaṃ* に話す人でない。

(6) A IV 163-164 *seyyathā pi devānam inda gāmassa vā nigamassa vā avidūre mahādhaññarāsi, tato mahājanakāyo dhaññaṃ āhareyya kācehi pi piṭakehi pi ucchaṅgehi pi añjalīhi pi. yo nu kho devānam inda taṃ mahājanakāyaṃ upasaṅkamitvā evaṃ puccheyya : kuto imaṃ dhaññaṃ āharathā ti. kathaṃ vyākaramāno nu kho devānam inda so mahājanakāyo sammā vyākaramāno vyākareyyā ti. amumhā mahādhaññarāsimhā āharāmā ti kho bhante so ma-*

hājanakāyo sammā vyākaramāno vyākareyyā ti.

「神々の王よ、例えば集落あるいは町の近くに (*avidūre*) 大きな穀物の山がある。そこから大勢の人々が穀物を担ぎ棒やかごや腰や手のひらを使って運ぶとしよう。神々の王よ、ある者がその大勢の人々に近づいて『*idaṃ* 穀物をどこから運んでくるのか』とこのように問う場合、どのように答えるなら、神々の王よ、その大勢の人々は正しく答えることになるかね」。「尊き君よ、『*adum/amum* 大きな穀物の山から運んでくる』と答えるなら、その大勢の人々は正しく答えることになるでしょう」。

このように一方と他方を対照する使われ方は対照用法 (*contrastive use*) と言われる。しかし、こうした例からただちに *adum/amum* の意味を決めることはできない。というのも、単独で指示する場合と対照用法とでは、指示詞の使われ方が異なるからである (Wilkins 1999, Levinson 2018: 32 など)。つまり、対照用法の使われ方がそのまま指示詞の意味になるとは限らないと考えなければならぬ。(5), (6) は対照される指示対象の位置が異なるため、確かに *adum/amum* は *idaṃ* と対立しており、*idaṃ* より遠いものを指してはいる。しかし、先に述べたように *adum/amum* の出現回数は他の指示詞と比べてかなり少ない。その内、対照用法の他に現場指示と思われる用例はほとんどなく、前方照応として使われることの方が多い。したがって、従来の *adum/amum* の説明は対照用法のこととして理解されねばならない。

Cone (2001–2020) は、*etaṃ* が指示の動作を伴うと述べる⁸。確かに、*etaṃ* は指示の動作とともに用いられることがある。(4) では、語りの文で指示の動作が描かれている。しかしながら、こうした描写がなくても、動作があった可能性は十分考えられる。例えば (1), (2) の *idaṃ* や (6) の *adum/amum* などは、いかにも指示の動作を伴っていそうである⁹。指示の動作を伴うことが *etaṃ* の特徴であったかどうか、文献言語であるパーリ語に関しては確かめることが困難である。

以上のように、従来の理解は指示詞の多様な使われ方の一面にしか当てはま

らないものだと言える。Cone (2001–2020) が加える心的な距離のような説明は、そのままでは曖昧であり、検証や議論が必要な問題である。したがって、パーリ語の指示詞に対するこれまでの理解は、多様な使われ方を総合的に捉えたものとは言い難い。

5. 本論文の見方

上述の問題に対して、本論文では近年の指示詞研究を参考に、話し手・聞き手・指示対象の關係に注目した考察を行う。具体的な例は後に見ていくとして、ここでは、指示詞とその研究の簡単な紹介とともに、*idam*, *etam*, *adum/ amum* に対する本論文の理解をまとめる。

指示詞の基本は、直示の中心 (deictic center) をもとに指示対象の空間的な位置を指し示すこととされる (Anderson and Keenan 1985, Diessel 1999, Dixon 2003 など)。直示の中心は話し手、聞き手、その両方に置かれる場合などがある。指示対象が直示の中心から近いか遠いかの距離的な關係 (distance) が最も基本的な区別と考えられている。言語によってはさらに中距離などの区別がある。また、距離の他にも可視性 (visibility) や高さ (elevation) や有生性 (animacy) など、様々な区別の基準がある。

こうした点から指示詞研究が進められてきた一方、近年では話し手・聞き手の相互行為に注目して指示詞を見直す研究が行われている。ラオ語の指示詞の研究である Enfield (2003, 2018) は、その代表的な研究と言える¹⁰。ラオ語にも距離の点から近称・遠称と考えられてきた指示詞がある。しかし、Enfield (2003, 2018) は具体的な対話の場における使われ方を観察することで、話し手・聞き手の相互行為の点からその意味を見直した。

ラオ語で従来、近称とされてきた指示詞は意味的な限定を持たずに指示だけをする、無標の指示詞である。遠称とされてきた方は “not here” という限定を持つ有標の指示詞である。対話の場では、文脈 (context) に応じて空間的・社会的・文化的な境界である “here-space” が設けられ、有標の指示詞に対し

て無標の方に“here”の限定が付与される。この境界は個々の対話の場における文脈をもとに設けられるもので、話し手・聞き手の相互行為（例えば、買い物における品物のやりとり）によって絶えず変化する動的な範囲である¹¹。

このように、近年の指示詞研究で話し手と聞き手が注目されるのは、指示詞が両者の相互的な行為のもとに成り立っているからである。指示詞の基本的なはたらきは、話し手と聞き手の間の協調問題（coordination problem）の解決（Enfield 2003, 2018）、あるいは共同注意（joint attention）を指示対象に向けること（Levinson 2004, 2018；Diessel 2006 など）と言われる。指示は話し手だけの行為ではない。指示されたものは聞き手に同定されなければならない、指示対象の同定は発話の場の文脈に依存している。そのため、指示詞は個々の場面のみならず、社会や文化といった広い文脈において研究されることが求められる（Sidnell and Enfield 2017 など）。

文献言語であるパーリ語に対して指示詞研究が行うような調査はできないが、個々の場面における話し手・聞き手の相互関係に注目した分析は、パーリ語においても有益だと考えられる。以下に、パーリ語の指示詞に対する本論文の理解を述べる。

指示詞 *idam*, *etam*, *adum/amum* の基本的な区別は、指示対象が話し手あるいは話し手・聞き手と同一の場、すなわち発話あるいは対話の場にあるかどうかだと考えられる。この判断は話し手が行うもので、指示対象が発話／対話の場にあると判断されれば *idam* が使われ、ないと判断されれば *etam* か *adum/amum* が使われる。指示対象の位置は個々の場面において異なるため、この判断は、そのつどの文脈における話し手・聞き手・指示対象の関係によって動的に変化すると考えられる。指示対象の空間的な位置は判断の主要な要素と言える。指示対象が発話／対話の場から遠い場合や異なる場所にある場合には、基本的に *etam* が使われるようである。

指示詞の区別には、空間的な位置だけでなく、テリトリーや指示対象との関わり方も関わっていると考えられる。後に詳しく見ていくが、*idam* は空間的に遠いものに対して使われることがある。これは指示対象が話し手のテリト

リーに入っていたり、主題として取り上げる場合などの要因が働いているためだと考えられる。

etam と adum/amum の指示範囲は重なるように見えるのだが、このことは adum/amum の現場指示が極端に少ないことを説明するだろう。つまり、idam と etam が主な対立関係を作っていて、adum/amum は現場指示に関して、使われない形式になりつつあると考えることができる。

以上に述べたように、idam, etam, adum/amum において区別されているのは、指示対象が発話／対話の場にあるかどうかだと考えられる。この考察は、近年の指示詞研究によって示される話し手・聞き手の相互行為の関係を参考にしたものであり、文献言語であるが故に情報の限られているパーリ語に対しても、有益な見方だと考えられる。次章から実際の例を検討して、本章に述べたことを確かめていこう。

6. idam と etam

idam と etam はテキストで頻繁に使われるが、adum/amum の現場指示の例はかなり少ない。そこで、まず idam と etam に焦点を当てて検討していくことにする。ここからは位置関係、テリトリー、指示対象との関わり方という3点に分けて見ていく。しかし、この区別は現在のところの作業仮説であり、また実際には複合的であることが注意されるべきである。

6.1. 位置関係

6.1.1. idam の使われ方

それではまず、話し手・聞き手・指示対象の位置関係から、idam の使われ方を中心に見ていこう。idam は話し手（・聞き手）と同一の場、すなわち発話／対話の場にあると話し手が判断する対象を指すと考えられる。

(7) では指示対象に idam と etam の両方が使われており、その違いがわかりやすい。ブッダに会うために比丘の団体が集まり、にぎやかにしている。ブ

ツダはにぎやかな声の主が誰なのか、アーナンダに尋ねる。この時、ブツダとアーナンダはにぎやかな団体を *etaṃ* で指す。次に、団体がブツダに呼ばれて、にぎやかなわけを聞かれる。その返答で、彼らは自分たちの団体を *idaṃ* で指す。

(7) M I 456-457 *tena kho pana samayena sārīputtamoggallānapamukhāni pañcamattāni bhikkhusatāni cātumaṃ anuppattāni honti bhagavantaṃ dassanāya, te ca āgantukā bhikkhū nevāsikehi bhikkhūhi saddhiṃ paṭisammodayānā senāsanāni paññāpayamānā pattacīvarāni paṭisāmayamānā uccāsaddā mahāsaddā ahesuṃ. atha kho bhagavā āyasmantaṃ ānandaṃ āmantesi : ke pan' ete ānanda uccāsaddā mahāsaddā kevaṭṭā maññe macchavilope ti. etāni bhante sārīputtamoggallānapamukhāni pañcamattāni bhikkhusatāni cātumaṃ anuppattāni bhagavantaṃ dassanāya, ... ti. tena h' ānanda mama vacanena te bhikkhū āmanatehi : satthāyasmante āmantetī ti. ... ekamantaṃ nisinne kho te bhikkhū bhagavā etad avoca : kin nu tumhe bhikkhave uccāsaddā mahāsaddā kevaṭṭā maññe macchavilope ti. imāni bhante sārīputtamoggallānapamukhāni pañcamattāni bhikkhusatāni cātumaṃ anuppattāni bhagavantaṃ dassanāya, te 'me āgantukā bhikkhū ... uccāsaddā mahāsaddā ti.*

またその時、サーリプッタとモッガッラーナを先頭にした五百人の比丘たちが、世尊に会うため、チャートゥマーに順次到着していた。そのやって来た比丘たちは在住の比丘たちとともに喜び合い、寝床や席を用意し合い、器や衣を準備し合いながら声高に、大声になった。その時、世尊は長寿なる者アーナンダに告げた。「アーナンダよ、*etaṃ* 声高な、大声の連中は誰かね。漁師たちが魚を取っていく時のようだ。「尊き君よ、*etaṃ* は世尊に会うため、チャートゥマーに順次到着している、サーリプッタとモッガッラーナを先頭にした五百人の比丘たちです。…」。「アーナンダよ、それでは私の言葉で、その比丘たちに告げなさい、『師が長寿なる者たちを呼んでいる』と」。…一方に座ったその比丘たちに世尊は次のことを言

った。「比丘たちよ、一体どうして君たちは声高に、大声になっているのかね。漁師たちが魚を取って行く時のようだ」。「尊き君よ、**idaṃ** は世尊に会うため、チャートゥマーに順次到着している、サーリプッタとモグガッラーナを先頭にした五百人の比丘たちです。そのような **idaṃ** やって来た比丘たちは…声高に、大声になっています¹²」。

(7) において、**idaṃ** と **etaṃ** にはどんな違いがあるだろうか。はじめに **etaṃ** が使われる時、指示対象となる団体はブッダとアーナンダの対話の場におらず、にぎやかな声だけが聞こえている。一方、団体が **idaṃ** を使う際は、指示対象である団体がブッダとの対話の場にいる。したがって、指示対象の位置の違いから、**idaṃ** と **etaṃ** が使い分けられていると考えることができる。

このことを念頭に置いて、他の例を見ていこう。(8) では話し手が自分に刺さった矢に **idaṃ** を使っている。一方、(9)、(10) では指示対象が聞き手側にあるのだが、話し手は **idaṃ** を使っている。(9) はブッダと王子の対話である。王子は子供を膝に乗せており、王子とブッダのどちらもがその子供を **idaṃ** で指す。(10) はたとえ話だが、大臣たちが捕まえた盗賊に対して、王も **idaṃ** を使っている。

(8) M I 429 na tāvāhaṃ **imaṃ** sallaṃ āharissāmi yāva na taṃ purisaṃ +jānāmi¹³ yen' amhi +viddho :¹⁴ khattiyo vā brāhmaṇo vā vesso vā suddo vā ti. 俺を射抜いた人物がクシャトリヤかブラーフマナかヴァイシャカシュードラかわからない限り、**idaṃ** 矢を抜かないぞ。

(9) M I 394–395 tena kho pana samayena daharo kumāro mando ut-tānaseyyako abhayassa rājakumārassa aṅke nisinno hoti. atha kho bhagavā abhayaṃ rājakumāraṃ etaḍ avoca : taṃ kim maññasi rājakumāra : **sacāyaṃ** kumāro tuyhaṃ vā pamādam anvāya dhātiyā vā pamādam anvāya kaṭṭhaṃ vā kaṭhalaṃ vā mukhe āhareyya. kinti naṃ kareyyāsī ti. āhareyy' **assaṃ** bhante.

sace ahaṃ bhante na sakkuṇeyyaṃ ādiken’ eva āhattuṃ, vāmena hatthena sīsaṃ pariggahetvā dakkhiṇena hatthena vaṅkaṅgulīṃ karitvā salohitam pi āhareyyaṃ. 一方その時、幼く、柔らかく、仰向けに寝ているくらいの男児がアバヤ王子の膝に座っていた。そこで世尊はアバヤ王子に次のことを言った。「王子よ、あなたはどうか考えますか。もし **idaṃ** 男児があなたの不注意で、あるいは乳母の不注意で、木片が砂利を口に運ぶとしましょう。あなたはどんなことをその子にするでしょうか。」「尊き君よ、私は **idaṃ** の〔口から〕取り出しましょう¹⁵。尊き君よ、もし私がすぐに取り出すことができないのであれば、左手で頭をつかんで、右手で指を曲げて、血が出ようとも取り出しましょう」。

(10) D II 321 idha te purisā coraṃ āgucāriṃ gahetvā dasseyyūṃ : **ayan** te bhante coro āgucārī, **imassa** yaṃ icchasi taṃ daṇḍaṃ panehī ti. te tvam evaṃ vadeyyāsi : tena hi bho **imaṃ** purisaṃ daḥhāya rajjuyā pacchābāhaṃ gāḷhabandhanaṃ bandhitvā, ... dakkhiṇato nagarassa āghātane sīsaṃ chindathā ti.

ここで、大臣たちがあなた（王）に悪事を働く盗賊を捕まえて見せるとしよう。「尊き君よ、**idaṃ** があなたに悪事を働く盗賊です。**idaṃ** にあなたの望む罰を与えてください」。あなたは彼らに次のように述べるとしよう。「それでは、**idaṃ** 男をしっかりした縄で、腕を後ろにして強く縛り、…都城の南にある処刑場にて、頭をはねよ」。

これらの例では、話し手側にあるものを指す場合と聞き手側にあるものを指す場合とで、同じ指示詞が使われている点が注目される。一方、次の(11)では、聞き手側にあるものに **etaṃ** が使われている。池に入って蓮の香りをかいている比丘を神格が注意するのだが、蓮を **etaṃ** で指している。どうして(9)、(10)と指示詞が異なるのだろうか。比丘がその場に居合わせた他の人物に **idaṃ** を使うことにも注意したい。

(11) S I 204 tena kho pana samayena so bhikkhu pacchābhattam piṇḍapāta-
paṭikkanto pokkharaniṃ ogāhetvā padumam upasiṅghati. atha kho yā tasmim
vanasaṅḍe adhiwatthā devatā tassa bhikkhuno anukampikā atthakāmā taṃ
bhikkhuṃ saṃvejetukāmā yena so bhikkhu ten' upasaṅkami. upasaṅkamtivā taṃ
bhikkhuṃ gāthāya ajjhabhāsi :

yam **etaṃ** vārijaṃ pupphaṃ adinnam upasiṅghasi
ekaṅgam etaṃ theyyānaṃ gandhattheno 'si mārisā ti.

na harāmi na bhañjāmi **ārā** siṅghāmi vārijaṃ
atha kena nu vaṇṇena gandhattheno ti vuccati.

yvāyaṃ bhisāni khaṇati puṇḍarīkāni bhuñjati
evam ākiṇṇakammanto kasmā eso na vuccati.

一方その時、その比丘は食後に托鉢から戻ってくる際、蓮池に入って蓮を
かいでいた。そこで、その森の茂みに住んでいる神格がその比丘に同情
し、利益を求めて、その比丘を震えさせてやろうとして、その比丘のと
ころに近づいた。近づいてから、その比丘に詩（韻文）で話しかけた。

「**etaṃ** 蓮の花を、与えられていないのに君はかいでいる、
それは盗みの一部である。同士よ、君は香り泥棒だ」。

「私は持っていかないし、壊していない。遠くから (**ārā**) 蓮をかいでい
る。

そこでいったいどんな理由で、香り泥棒と言われるのか。

idaṃ はレンコンを掘り起こし、白蓮をはじめとする蓮を食べている¹⁶、
この通り、行為が乱雑であるのに、どうして彼は言われないのか」。

まず **etaṃ** に関しては、位置の違いが考えられる。(9), (10) は話し手・聞
き手・指示対象が同じ場所にいると理解できる。一方、(11) では聞き手と指
示対象の位置が池の中である。話し手である神格の位置ははっきりしないが、
岸边にいて池に入っていないとすれば、聞き手・指示対象との位置が異なるこ
とになる。なお、比丘は蓮を「遠くから (**ārā**)」かいでいると言うが、これは

言い訳とも考えられるため、実際に聞き手と指示対象が離れているかどうかの参考にするのは難しい¹⁷。

次に *idaṃ* だが、指示対象となる人物が池に入っていることは明白だろう。したがって、話し手と指示対象は同じ場所にいると理解できる。こうしたことから、神格が *etaṃ* を使う文脈は *idaṃ* と異なり、指示対象との間に何らかの隔たりがあると考えることができる。

話し手・聞き手のいる場所には *idaṃ* が使われる。例えば、D I 17 *ayaṃ loko* 「*idaṃ* 世界」はいわゆる現世のことである。次の (12) は、王に死の予感を感じ取った王妃が王を活気づけるために広大な領土を指し示すことばである。こうした場面は、話し手・聞き手が指示対象の中に含まれていて、指示対象を隔てる位置的な関係がない状況だと言える。

(12) D II 190 *imāni kho te deva caturāsītinagarasahassāni kusāvafīrājadhānipa-*
mukhāni, ettha deva chandaṃ janehi, jīvite apekhaṃ karohi.

「王よ、あなたには首都クサーヴァティーを主とする *idaṃ* 8万4千の都城があります。それに意欲を生み出してください。生活に関心を示してください」。

6.1.2. *etaṃ* の使われ方

次に *etaṃ* を検討していこう。(7), (11) でも考察したが、*etaṃ* は発話／対話の場にないと話し手が判断する対象を指す指示詞だと考えられる。

(13) では、2つの場面で *etaṃ* が使われている。まず初めは、王がブッダに会うためにマンゴー園の講堂に向かう場面である。その道中、マンゴー園の「近く (*avidūre*)」で、王は騙し討ちに遭ったのではないかと心配になる。従者のジーヴァカが講堂の明かりを指しながら安全であることを伝えるのだが、この時、*etaṃ* が使われる。次に、講堂の入り口に到着した場面である。講堂には大勢の比丘が集まっている。王がジーヴァカにブッダの居場所を尋ねると、ジーヴァカは *etaṃ* を使ってブッダを指し示す¹⁸。

(13) D I 49–50 atha kho rañño māgadhasa ajātasattussa vedehiputtassa **avidūre** ambavanassa ahudeva bhayaṃ, ahu chambhitattaṃ, ahu lomahaṃso. atha kho rājā māgadho ajātasattu vedehiputto bhīto saṃviggo lomahaṭṭhajāto jīvakaṃ komārabhaccaṃ etad avoca : kacci maṃ samma jīvaka na vañcesi. ... ti. mā bhāyi mahārāja. na taṃ deva vañcemi, ... abhikkama mahārāja. **ete** maṇḍalamāle dīpā jhāyanti ti. atha kho rājā māgadho ajātasattu vedehiputto yāvaticā nāgassa bhūmi nāgena gantvā, nāgā paccorohitvā pattiko va yena maṇḍalamālassa dvāraṃ ten' upasaṃkama, upasaṃkamtivā jīvakaṃ komārabhaccaṃ etad avoca : kahaṃ pana samma jīvaka bhagavā ti. **eso** mahārāja bhagavā. **eso** mahārāja bhagavā majjhimaṃ thambhaṃ nissāya puratthābhīmu kho nisinno purakkhato bhikkhusaṃghassa ti. atha kho rājā māgadho ajātasattu vedehiputto yena bhagavā ten' upasaṃkama.

その時、マンガー園の近くで (**avidūre**)、マガダ国王アジャータサットゥ、ヴェーデーヒーの息子に恐怖が生じ、硬直が起こり、身の毛がよだつた。その時、マガダ国王アジャータサットゥ、ヴェーデーヒーの息子は恐れおののき、身の毛がよだつた状態で、王子の養育係ジーヴァカに次のことを言った。「友ジーヴァカよ、私をだましているのではあるまいな。…」。「大王よ、恐れてはなりません。王よ、私はあなたをだましてはおりません。…大王よ、歩を進めなさい。円形講堂には **etaṃ** 明かりがついています」。そこで、マガダ国王アジャータサットゥ、ヴェーデーヒーの息子は象の行ける場所まで象で行って、象から降り、徒歩で円形講堂の入り口に近づいた。近づいてから、王子の養育係ジーヴァカに次のことを言った。「けれども、友ジーヴァカよ、世尊はどこにいるのだね」。「大王よ、**etaṃ** が世尊です。大王よ、**etaṃ** が世尊です。中央の柱に寄りかかり、東向きに座っていて、比丘サンガを前にしています」。そこでマガダ国王アジャータサットゥ、ヴェーデーヒーの息子は世尊のところに近づいた。

etaṃ が使われるいずれの文脈においても、指示対象が対話の場に入ってい

ないと理解することができる。まず、講堂の明かりを *etaṃ* で指す場面を考えてみよう。注目したいのは、講堂まで距離があるということである。このやりとりはマンゴー園の「近く (*avidūre*)」で行われているのだが、移動の様子から、明かりのついた講堂は対話の場からまだ距離のあることがわかる。

次に、ブッダを *etaṃ* で指す場面である。ジーヴァカは王にブッダの居場所を尋ねられる。2人は講堂の入り口にいる。一方、ブッダは中央の柱のところにおり、その前には大勢の比丘が集まっている。居場所を確認した王はブッダのところへ移動する。位置の違いと間にいる大勢の比丘によって対話の場と指示対象を隔てる状況が作られていると理解できる。

(14) では指示対象の遠さが明示されている。王が「遠くから (*dūrato*)」やって来るアーナンダを見つけて大臣に尋ねる場面である。王も大臣も *etaṃ* を使ってアーナンダを指している。位置の違いという点において、基本的には遠い対象に *etaṃ* を使うと考えられる。

(14) M II 112 *addasā kho rājā pasenadi kosalo āyasmantaṃ ānandaṃ dūrato va āgacchantaṃ ; disvāna sirivaḍḍhaṃ mahāmatthaṃ āmantesi : āyasmā no eso, samma sirivaḍḍha, ānando ti. evaṃ, mahārāja ; āyasmā eso ānando ti.*

コーサラ国王パセーナディは、長寿なる者アーナンダが遠くから (*dūrato*) やってくるのを見た。見てから、大臣のシリヴァッダに話した。「君、シリヴァッタよ、*etaṃ* は長寿なる者アーナンダかね。「そうです、大王よ。*etaṃ* は長寿なる者アーナンダです」。

(15) からも、話し手と指示対象の位置の違いがよくわかる。話し手は、人々が様々に動いている様子を高い建物から見下ろしながら、*etaṃ* を使って人々を指す。高い建物と地上の違いが、話し手と指示対象を隔てる要因になっていることがわかる¹⁹。

(15) D I 83 *seyyathā pi mahārāja majjhe siṅghātake pāsādo, tattha cakkhumā*

puriso t̥hito passeyya manusse gehaṃ pavisante pi nikkhamante pi rathiyā vīthiṃ sañcarante pi majjhe pi siṅghātake nisinne. tassa evam assa : **ete** manussā gehaṃ pavisanti **ete** nikkhamanti **ete** rathiyā vīthi sañcaranti **ete** majjhe siṅghātake nisinnā ti.

大王よ、例えば、中央の十字路に高楼がある。そこに目の見える人が立って、人々が家に入ったり、出たり、車道を歩き回ったり、中央の十字路に座っていたりするのを見るとしよう。彼には次のような考えがあるとしよう。「**etaṃ** 人たちは家に入る、**etaṃ** は出ていく、**etaṃ** は車道を歩き回っている、**etaṃ** は中央の十字路に座っている」。

etaṃ は発話／対話の場にはないものにも使われる。(7) では、にぎやかな声だけが聞こえ、対話の場にはない団体に **etaṃ** を使っていた。次の (16) は、神通力でその場から消え去った人物について、従者たちと主人のサッカが対話する場面である。従者たちは消え去った人物をブツダだと思い、サッカに尋ねる。サッカがそれに答えるのだが、この時、従者たちもサッカも指示対象に **etaṃ** を使う。

(16) M I 254–255 atha kho āyasmā mahāmogallāno sakkassa devānam indassa bhāsitaṃ abhinanditvā anumoditvā seyyathā pi nāma balavā puriso samiñjitaṃ vā bāhaṃ pasāreyya pasāritaṃ vā bāhaṃ samiñjeyya evam evam devesu tāvatimsesu antarahito pubbārāme migāramātu pāsāde pāturahosi. atha kho sakkassa devānam indassa paricārikāyo acirapakkante āyasmante mahāmogallāne sakkam devānam indaṃ etad avocum : **eso** nu te mārisa so bhagavā satthā ti. na kho me mārisā so bhagavā satthā, sabrahmacārī me **eso**, āyasmā mahāmogallāno ti.

さて、長寿なる者、偉大なモツガッラーナは神々の王サッカの話に喜び、歓喜して、例えば力持ちの男が曲げてある腕を伸ばすように、あるいは伸ばしてある腕を曲げるように、まったく同様に三十三天において消え、ブ

ツバラーマにある高樓ミガーラマートゥに現れた。さて、長寿なる者、偉大なモッガッラーナが去って間もなく、神々の王サッカの従者たちが神々の王サッカに次のことを言った。「同志よ、**etaṃ** がかの世尊、あなたの師ですか²⁰」。「同志よ、かの世尊、私の師ではない。**etaṃ** は私の同行者、長寿なる者、偉大なるモッガッラーナだ」。

次の (17) は、法螺貝吹きが辺境の地で法螺貝を鳴らす場面である。この音を法螺貝を知らない辺境の人々が聞く。この時、辺境の人々も法螺貝吹きも音を **etaṃ** で指すのだが、音はもう鳴り止んでいる。そのため、指示対象の音は発話／対話の場にはないものと理解できる。

人々は法螺貝を鳴らそうとして、立てたり寝かせたりと様々な方法を試みる。しかし音は鳴らず、法螺貝吹きが法螺貝を携えて去っていく。この時、人々は法螺貝を **idaṃ** で指す。指示対象の法螺貝は法螺貝吹きが持って行ったため、人々の手元にはないのだが、どうして **idaṃ** が使われるのだろうか。**etaṃ** との違いとして、法螺貝がまだ見えているという可能性が十分ありうる。法螺貝吹きは (16) のように神通力で消え去るわけではない。話し手は今まで手元にあり、音を鳴らそうとしていた法螺貝を持って行く法螺貝吹きを眺めている状況にあると考えられる²¹。なお、法螺貝吹きは、見当違いの方法で音を鳴らそうとする人々を指すのに **idaṃ** を使っている。人々はこれまでの対話者でもあるため、対話の場に指示対象があるという関係になる。

(17) D II 337–338 so yen’ aññataro gāmo ten’ upasaṃkamaṃ, upasaṃkamitvā majjhe gāmassa t̥hito tikkhattuṃ saṅkhaṃ upaḷāsivā saṅkhaṃ bhūmiyaṃ nikkhipitvā ekamantaṃ nisīdi. atha kho rājañña tesam paccantajānaṃ manussānaṃ etad ahoṣi : kissa nu kho **eso** saddo evaṃ rajanīyo ... evaṃ mucchanīyo ti. sannipatitvā taṃ saṅkhadhamam etad avocuṃ : ambho kissa nu kho **eso** saddo evaṃ rajanīyo ... ti. eso kho bho saṅkho nāma yass’ **eso** saddo evaṃ rajanīyo ... ti. te taṃ saṅkhaṃ uttānaṃ nipātesuṃ : vadehi bho saṅkha, vadehi

bho saṅkhā ti. n' eva so saṅkho saddam akāsi. te taṃ saṅkhaṃ avakujjaṃ nipātesuṃ. ... atha kho rājañña tassa saṅkhadhamassa etad ahoṣi : yāva bālā **ime** paccantajā manussā. kathaṃ hi nāma ayoniso saṅkhasaddaṃ gavesissantī ti. tesam pekkhamānānaṃ saṅkhaṃ gahetvā tikkhattuṃ saṅkhaṃ upalāsitvā saṅkhaṃ ādāya pakkāmi. atha kho rājañña tesam paccantajānaṃ manussānaṃ etad ahoṣi : yadā kira bho **ayaṃ** saṅkho nāma purisasahagato ca hoti vāyāmasahagato ca vāyosahagato ca, tad**āyaṃ** saṅkho saddaṃ karoti. yadā pan**āyaṃ** saṅkho n' eva purisasahagato hoti na vāyāmasahagato na vāyosahagato, n**āyaṃ** saṅkho saddaṃ karotī ti.

彼（法螺貝吹き）はある集落に近づいた。近づいてから、集落の中央に立ち、法螺貝を3度鳴らして、法螺貝を地面にほうり出し、一方に座った。王族よ、その時、その辺境の人々に次の考えが生じた。「一体、このように心が染められ、…このように恍惚とする、**etaṃ** 音は何の音だ」。彼らは落ち合って、その法螺貝吹きに次のことを言った。「おいおい、一体、…**etaṃ** 音は何の音だね」。「君、…**etaṃ** 音の出どころは、法螺貝というものだ」。彼ら（辺境の人々）はその法螺貝を上向きに置いた。「鳴れ、法螺貝。鳴れ、法螺貝」。その法螺貝は音を出さなかった。彼らはその法螺貝を下向きに置いた。…王族よ、そこでその法螺貝吹きに次の考えが生じた。「**idaṃ** 辺境の人々はなんとも愚かだ。どうして理にかなわずに法螺貝の音を求めようとするのか」。彼らが見ているところで、彼は法螺貝をつかみ、3回法螺貝を鳴らして、法螺貝を取り、出て行った。王族よ、そこでその辺境の人々に次の考えが生じた。「君、**idaṃ** 法螺貝というものとは人と一緒にあり、努力と一緒にあり、風と一緒にある時、その時に **idaṃ** 法螺貝は音を出すようだ。けれども **idaṃ** 法螺貝が人と一緒になく、努力と一緒になく、風と一緒にない時、**idaṃ** 法螺貝は音を出さない」。

6.2. テリトリーとの関係

以上に、対話の場における話し手・聞き手・指示対象の物理的な位置関係を

見てきた。一方で、指示詞の区別は住み家など話し手のテリトリーにも関わっていると考えられる。

(18) は殺人鬼アングリマーラの話である。ブッダはアングリマーラの出没する道に差し掛かる。それを見かけた人々がブッダにそれ以上行かないよう忠告する。この時、人々は道を *etaṃ* で指す。忠告を受けたけれども、ブッダは一人で道を進んでいく。アングリマーラはブッダがたった一人でやって来るのを見つけて殺害を企てるのだが、道とブッダを *idaṃ* で指す。ブッダは「遠くから (*dūrato*)」やって来ると言われることに注意したい。(14) で述べたように、空間的に離れている対象には基本的に *etaṃ* が使われると考えられるのだが、どうして (18) では *idaṃ* が使われるのだろうか。ここでは話し手のテリトリーに関係して、*idaṃ* が使われていると考えられる。

(18) M II 98–99 *addasāsuṃ kho gopālakā pasupālakā kassakā[†] pathāvino²² bhagavantam yena coro aṅgulimālo ten’ addhānamaggaṃ paṭipannaṃ ; disvā bhagavantam etad avocum : mā, samaṇa, **etaṃ** maggaṃ paṭipajji. **etasmim**, samaṇa, magge coro aṅgulimālo nāma luddo lohitaṇṇā hatapahate nivittṭho adayāpanno paṇabhūtesu. tena gāmā pi agāmā katā, nigamā pi anigamā katā, janapadā pi ajanapadā katā. so manusse vadhitvā vadhitvā aṅgulīnaṃ mālaṃ dhāreti. **etaṃ** hi, samaṇa, maggaṃ dasa pi purisā vīsatiṃ pi purisā timsatiṃ pi purisā cattārisaṃ pi purisā saṃharitvā saṃharitvā paṭipajjanti, te pi corassa aṅgulimālassa hatthattaṃ gacchanti ti. evaṃ vutte bhagavā tuṇhībhūto agamāsi. ... addasā kho coro aṅgulimālo bhagavantam **dūrato** va āgacchantam, disvāṇ’ assa etad ahoṣi : acchariyaṃ vata, bho, abbhutaṃ vata, bho. **imaṃ** hi maggaṃ dasa pi purisā vīsatiṃ pi purisā timsatiṃ pi purisā cattārisaṃ pi purisā paññāsaṃ pi purisā saṃharitvā saṃharitvā paṭipajjanti, te pi mama hatthattaṃ gacchanti ; atha ca **panāyaṃ** samaṇo eko adutiyo pasayha maññe āgacchati. yan nūnāhaṃ **imaṃ** samaṇaṃ jīvitaṃ voropeyyan ti.*

牛飼いたち、家畜番の者たち、農夫たち、旅人たちは世尊が盗賊アングリ

マーラのところに向かって、旅路を進んでいるのを見た。見てから、世尊に次のことを言った。「沙門よ、**etam** 道を進んではなりません。沙門よ、**etam** 道にはアングリマーラという盗賊、恐ろしく、手が血で染まった、打ち殺された者たちの中に住んでいる、生き物に対して非情の者がいます。彼によって村落は村落でなくされ、街は街でなくされ、地方は地方でなくされました。彼は人々を次々に殺して、指の花輪を付けています。沙門よ、**etam** 道を 10 人、20 人、30 人、40 人もの人々が集まって、進みますが、彼らもまた盗賊アングリマーラの手を目指して行くことになるのです」。このように言われて、世尊は黙ったまま行った。…盗賊アングリマーラは世尊が遠くから (**dūrato**) やって来るのを見た。見てから、この者に次の考えが生じた。「なんとすごい！なんと驚きだ！**idam** 道を 10 人、20 人、30 人、40 人、50 人もの人々が集まって進むが、彼らもまた俺の手を目指して来ることになる。ところが **idam** 沙門は、一人で付き添いもなく、まるで力づくのようにしてやって来る。**idam** 沙門を命から引きずり下ろしてはどうだろう」。

アングリマーラの潜んでいる道は、牛飼いたちにとって危険な場所である。ブッダに忠告している時点では、彼らはまだ安全な場にいるはずだ。指示対象となる危険な道は彼らのいる場所と区別されるテリトリーの外であるため、**etam** を使っていると考えられる。

一方、アングリマーラにとって、問題の道は殺人を犯すことができる自身のテリトリーである。道をやって来たブッダはテリトリーの内に入った、いわば獲物である。そのため、ここでは指示対象の空間的な位置に関わらず、道とブッダのいずれをも **idam** で指していると考えられる²³。

次の (19) でも、話し手によって **idam** と **etam** が使い分けられている。ある時、つる草の種がサーラ樹の根本に落ちる。この木を住み家にしてしている神格は種を恐れるのだが、やがて芽吹いて触り心地のよいつるが木に付くと、つる草に心地よさを感じる。つる草には **idam** が使われる。指示対象のつる草は、

話し手の住み家である木に巻き付いており、話し手はそれに触れて楽しむことができるという位置関係にある。

一方、つる草の種を恐れていた時に友人や親族などが神格をなぐさめに来るのだが、彼らは種を指すのに *etaṃ* を使う。種は神格の住み家、すなわち聞き手のテリトリーの内にある。対して、話し手は助言をするだけで、直接的には種に関与しないと言える。この関係において、指示対象は話し手の側にはないと判断されるのではないかと考えられる。

(19) M I 306 *seyyathā pi bhikkhave gimhānaṃ pacchime māse māluvāsipāṭikā phaleyya, atha kho taṃ bhikkhave māluvābījaṃ aññatarasmiṃ sālāmūle nipateyya. atha kho bhikkhave yā tasmim̐ sāle adhivatthā devatā sā bhītā saṃviggaṃ santāsaṃ āpajjeyya. atha kho bhikkhave tasmim̐ sāle adhivatthāya devatāya mittāmaccā ñāṭisālohitā, ... saṅgama samāgama evaṃ samassāseyyuṃ : mā bhavaṃ bhāyi. mā bhavaṃ bhāyi, appeva nāma' etaṃ māluvābījaṃ moro vā gileyya ... upacikā vā udrabheyyuṃ, abījaṃ vā pan' assā ti. atha kho taṃ bhikkhave māluvābījaṃ n' eva moro gileyya ... bījaṃ pan' assa. taṃ pāvussakena megghena abhippavattaṃ sammadeva virūheyya, sā 'ssa māluvālatā taruṇā mudukā lomasā vilambinī, sā taṃ sālāṃ upaniseveyya. atha kho bhikkhave tasmim̐ sāle adhivatthāya devatāya evaṃ assa : kiṃ su nāma te bhonto mittāmaccā ñāṭisālohitā, ... māluvābīje anāgatabhayaṃ sampassamānā saṅgama samāgama evaṃ samassāsesuṃ : mā bhavaṃ bhāyi. ... ti ; sukho imissā māluvālatāya taruṇāya mudukāya lomasāya vilambiniyā samphasso ti.*

例えば、比丘たちよ、夏の終わりの月に、つる草の果皮がはじけるとしよう。その時、比丘たちよ、そのつる草の種が、あるサーラ樹の根本に落ちるとしよう。その時、比丘たちよ、そのサーラ樹に住んでいる神格が恐れおののき、恐怖に陥るとしよう。その時、比丘たちよ、そのサーラ樹に住んでいる神格の友人や仲間、親族や血縁者、…が集まりやって来て、こうなだめるとしよう。「あなたは恐れなくていい。あなたは恐れなくていい。

etam つる草の種をクジャクが飲み込むか、…シロアリが食べるかするだろう。あるいはまた種ではないかもしれない」。その時、比丘たちよ、そのつる草の種をクジャクは飲み込まず、…また種であるとしよう。それは雨季の雨雲からの雨に降られて、よく芽吹くとしよう。そのつる草のつるは若くて柔らかくて、毛の生えた、垂れ下がるものだとしよう。それがそのサーラ樹を取り巻くとしよう。その時、比丘たちよ、そのサーラ樹に住む神格に次のような考えがあるとしよう。「いったい、その友人や仲間、親族や血縁者…は、つる草の種に、まだ訪れていないどんな恐怖を見て、集まりやって来て、こうなだめたのだろう。『あなたは恐れなくていい…』。若くて柔らかくて毛の生えた、垂れ下がる **idam** つる草の感触は心地よいものだ」。

同じ理解は (3) にも当てはまるだろう。(3) では指示対象の人々がブツダに会うために **idha** に集まっていると言われる。話し手・聞き手と同じ場所にいると考えられるのだが、指示詞は **etam** が使われていた。実はこの文脈において、話し手と聞き手は人々にブツダとの面会を認めることができない。話し手がブツダ本人に願い出て後、初めて面会が認められる。したがって、**etam** が使われるのは、指示対象に関する権限が話し手にないためではないかと考えられる。

次の (20) は、2人のヤッカ（人間と異なる存在）がブツダの「近く (**avidūre**)」を通り過ぎる場面である。ブツダはヤッカの住み家にいるため、指示対象が話し手のテリトリーの中にある状況と言える。そのため、(18) と同様に **idam** が使われてもよさそうだが、(20) では **etam** が使われる。この違いは、対話者の有無だと考えられる。(18) のアングリマーラには対話者がいないが、(20) では2人が歩きながら会話をしている。この時、テリトリーとは別に対話の場が形成されるのではないかと考えられる。

(20) S I 207 **ekaṃ samayaṃ bhagavā gayāyaṃ viharati taṅkitamañce suciloma-**

yakkhassa bhavane. tena kho pana samayena kharo ca yakkho sucilomo ca yakkho bhagavato **avidūre** atikkamanti. atha kho kharo yakkho sucilomaṃ yakkham etad avoca : **eso** samaṇo ti. n' **eso** samaṇo samaṇako **eso**. yāva jānāmi yadi vā so samaṇo yadi vā pana so samaṇako ti. atha kho sucilomo yakkho yena bhagavā ten' upasaṅkami.

ある時、世尊はガヤーにあるタンキタという壇における、スチローマというヤッカの住み家で過ごしていた。一方その時、ヤッカのカラとスチローマが世尊の近くを (**avidūre**) 通り過ぎていた。そこで、ヤッカのカラはスチローマに次のことを言った。「**etaṃ** は沙門だな」。「**etaṃ** は沙門じゃない。**etaṃ** はえせ沙門だ。彼が沙門かえせ沙門か、じきにわかるさ」。そこでヤッカのスチローマは世尊のところに近づいた。

6.3. 指示対象との関わり方

指示対象との関わり方も、指示詞を使い分ける要因になっていると考えられる。次の2例は山を指す場面である。場面がよく似ているが、使われる指示詞が異なっている。まず(21)を見てみよう。ブッダ一行がイシギリ山にいる。イシギリ山はラージャガハという都市を囲む5つの山の内の1つである(Malalasekera 1937 s.v. *Rājagaha*, 赤沼 1967 s.v. *Rājagaha*)。ブッダは他の山を **etaṃ** で指し、自分たちのいるイシギリ山を **idaṃ** で指す。

(21) M III 68 **ekaṃ** samayaṃ bhagavā rājagahe viharati isigilismiṃ pabbate. ... bhagavā etad avoca : passatha no tumhe, bhikkhave, **etaṃ** vebhāraṃ pabbatan ti. evaṃ, bhante. **etassa** pi kho, bhikkhave, vebhārassa pabbatassa aññā va samaññā ahoṣi aññā paññattī. passatha no tumhe, bhikkhave, **etaṃ** paṇḍavaṃ pabbatan ti. ... passatha no tumhe, bhikkhave, **etaṃ** vepullaṃ pabbatan ti. ... passatha no tumhe, bhikkhave, **etaṃ** giṃjhakūṭaṃ pabbatan ti. ... passatha no tumhe, bhikkhave, **imaṃ** isigiliṃ pabbatan ti. evaṃ, bhante. **imassa** kho, bhikkhave, isigilissa pabbatassa eṣā va samaññā ahoṣi eṣā paññattī. bhūtapub-

baṃ, bhikkhave, pañca paccekabuddhasatāni **imasmim** isigilismim pabbate ciranivāsino ahesuṃ. te **imaṃ** pabbataṃ pavisantā dissanti pavitṭhā na dissanti.

ある時、世尊はラージャガハのイシギリ山で過ごしていた。…世尊は次のことを言った。「比丘たちよ、君たちは **etaṃ** ヴェーバーラ山を見ているかね」。「はい、尊き君よ」。「比丘たちよ、**etaṃ** ヴェーバーラ山には別の呼称、別の名称があった。比丘たちよ、君たちは **etaṃ** パンダヴァ山を見ているかね」。…「比丘たちよ、君たちは **etaṃ** ヴェープッラ山を見ているかね」。…「比丘たちよ、君たちは **etaṃ** ギッジャクータ山を見ているかね」。…「比丘たちよ、君たちは **idaṃ** イシギリ山を見ているかね」。「はい、尊き君よ」。「比丘たちよ、**idaṃ** イシギリ山には他ならぬその呼称、その名称があった。比丘たちよ、昔、五百人の独覚たちが **idaṃ** イシギリ山に住んで久しかった。彼らが **idaṃ** 山に入っていくのは見えるが、入ってしまったら見えない」。

次の (22) では、ブッダー一行がギッジャクータ山にいる。ここから周囲の山の 1 つヴェープッラ山を指すのだが、使われる指示詞は **idaṃ** である。

(22) S II 190 *ekaṃ samayam bhagavā rājagahe viharati gijjhakūṭe pabbate. ... bhagavā etad avoca. ... bhūtapubbam bhikkhave imassa⁺ vepullassa²⁴ pabbatassa pācīnavamso tveva samaññā udapādi.*

ある時、世尊はラージャガハのギッジャクータ山で過ごしていた。…世尊は次のことを言った。「…比丘たちよ、昔、**idaṃ** ヴェープッラ山にパーチーナヴァンサという呼称が生じた」。

(21) では周囲の山に **etaṃ** が、自分たちのいる山に **idaṃ** が使われていた。ところが、(22) では周囲の山を **idaṃ** で指している。この違いは何だろうか。(21) の話は、**idaṃ** で指されるイシギリ山だけを話題にする。**etaṃ** で指された山は引用部分にだけ出てきて、その後は言及されない。(22) の話も **idaṃ**

で指されるヴェーブッラ山のことだけを話しており、他の山や自分たちのいる山は出てこない。したがって、話題として取り上げるものに *idaṃ* を使っていると考えることができる。

7. *aduṃ/amuṃ*

最後に *aduṃ/amuṃ* を見ていこう。(5), (6) に *aduṃ/amuṃ* の対照用法を紹介したが、*aduṃ/amuṃ* が単独で現場指示に用いられる例はほとんどない。(23) は位置関係が明確な例である。ガンジス河の岸にいるブッダが河を流れていく木の枝を指す。ここでは対話の場と指示対象の位置の違いがはっきりしている。

(23) S IV 179 *ekaṃ samayam bhagavā kosambiyā viharati gaṅgāya nadiyā tīre. addasā kho bhagavā mahantaṃ dārukkhandham gaṅgāya nadiyā sotena vuyhamānaṃ. disvāna bhikkhū āmantesi. passatha no tumhe bhikkhave amuṃ mahantaṃ dārukkhandham gaṅgāya nadiyā sotena vuyhamānaṃ ti. evaṃ bhante.* ある時、世尊はコーサンビーにおけるガンジス河の岸で過ごしていた。世尊は大きな木の枝がガンジス河の流れに運ばれていくのを見た。見てから、比丘たちに話した。「比丘たちよ、君たちは **aduṃ/amuṃ** 大きな木の枝がガンジス河の流れに運ばれていくのが見えるかね」。「はい、尊き君よ」。

位置が異なる指示対象に使われるという点で、*aduṃ/amuṃ* の指示範囲は *etaṃ* に重なると考えられる。しかし、他に現場指示として使われる際の文脈を読み取ることができる例は、(23) と同じ型の数例のみである。

一方、*aduṃ/amuṃ* には不特定のもの指す使われ方がある (Cone 2001–2020 : s.v. *asu*² “such and such, a certain”)。そのため、しばしば *aduṃ/amuṃ* の解釈がはっきりしなくなる。例えば、(24) は神通力を使っている比丘を見た

話し手が聞き手に報告する場面だが、**adum/amum** は現場指示としても不特定の人物としても解釈できそうである。

(24) D I 212–213 tam enaṃ aññataro saddho pasanno passati taṃ bhikkhuṃ anekavihiṭaṃ iddhiṭṭhaṃ paccanubhontaṃ ... tam enaṃ so saddho pasanno aññatarassa assaddhassa appasannassa āroceti : acchariyaṃ vata bho, abbhutaṃ vata bho, samaṇassa mahiddhikatā mahānubhāvata. **amāham** bhikkhuṃ addasaṃ anekavihiṭaṃ iddhiṭṭhaṃ paccanubhontaṃ.

信心深く清らかなある者がその彼を見る。すなわち、その比丘が多様な神通力の類を得ているのを。…その信心深く清らかな者が、信心深くなく清らかでないある者にその彼のことを説明する。「なんとすごい！なんと驚きだ！沙門の偉大な神通力、偉大な力というものは。私は **adum/amum** 比丘が多様な神通力の類を得ているのを見た」。

いずれにせよ、**adum/amum** は単独での現場指示用法が極端に少なく、指示範囲が **etaṃ** に近いことから、**adum/amum** は単独での現場指示よりも、対照用法や不特定のものを指す場合に使われる指示詞だと考えられる²⁵。

8. まとめ

本論文はパーリ語の指示詞 **idaṃ**, **etaṃ**, **adum/amum** の現場指示用法について論じた。従来、これらの指示詞は距離によって区別されていると考えられてきた。しかし実際には多様に使われており、従来の理解はその一部にしか当てはまらないものと言える。

本論文では近年の指示詞研究の見方を参考に、それぞれの指示詞を話し手・聞き手・指示対象の関係において捉え直した。この関係は、話し手によって指示対象が発話／対話の場にあると判断されるかどうかという点にまとめられると考えられる。

idaṃ が発話／対話の場にあると判断されるものに対して使われる。本論文ではこれを指示対象が話し手・聞き手と同一の場にある場合、テリトリーに入る場合、話題として取り上げる場合に分けて考察した。

etaṃ は発話／対話の場にないと判断されるものを指す。すなわち、話し手・聞き手と同一の場にない場合、テリトリーから外れる場合、話題でないものに言及する場合である。

adum/amum は単独での現場指示にほとんど使われない。数少ない例を見る限りでは、*etaṃ* の指示範囲と重なっているように見えるが、むしろ *adum/amum* は対照用法や不特定のもの指すために使われる指示詞と考えられる。

・略号と参考文献

A = Morris, Richard, E. Hardy, and A. K. Warder. 1888–1961. *The Aṅguttara-Nikāya*. 5 vols. London : Pali Text Society.

赤沼智善（編）1967『印度佛教固有名詞辞典』京都：法蔵館（復刊）。

Anderson, Stephen R. and Edward L. Keenan. 1985. “Deixis.” In Timothy Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description*, vol. 3, 259–308. Cambridge : Cambridge University Press.

Cone, Margaret. 2001–2020. *A Dictionary of Pāli*, 3 parts. Oxford and Bristol : Pali Text Society.

CPD = Trenckner, Vilhelm, et al. 1924–2011. *A Critical Pāli Dictionary*. 3 vols. Copenhagen and Bristol : Pali Text Society.

D = Davids, T. W. Rhys and J. Estlin Carpenter. 2006–2020. *The Dīgha-Nikāya*. 3 vols. Lancaster and Bristol : Pali Text Society.

Diessel, Holger. 1999. *Demonstratives : Form, Function, and Grammaticalization*. Amsterdam and Philadelphia : John Benjamins.

———. 2006. “Demonstratives, joint attention, and the emergence of grammar.” *Cognitive Linguistics* 17(4) : 463–489.

Dixon, R. M. W. 2003. “Demonstratives : A cross-linguistic typology.” *Studies in Language* 27(1) : 61–112.

Enfield, N. J. 2003. “Demonstratives in Space and Interaction : Data from Lao Speakers and Implications for Semantic Analysis.” *Language* 79(1) : 82–117.

———. 2018. “Lao Demonstrative Determiners *Nii*⁴ and *Nan*⁴ : An Intensionally Discrete Distinction for Extensionally Analogue Space.” In Stephen C. Levinson, Sarah Cutfield, Michael J. Dunn, N. J. Enfield, and Sérgio Meira (eds.), *Demonstratives in Cross-Linguistic Perspective*, 72–89. Cambridge : Cambridge University Press.

- Geiger, Wilhelm. 1916. *Pāli Literatur und Sprache*. Strassburg : K. J. Trübner (translated into English by Batakrishna Ghosh, revised and edited by K. R. Norman, *A Pāli Grammar*, 2000, Oxford : Pali Text Society).
- Himmelman, Nikolaus P. 1996. “Demonstratives in Narrative Discourse : A Taxonomy of Universal Uses.” In Barbara Fox (ed.), *Studies in Anaphora*, 205–254. Amsterdam and Philadelphia : John Benjamins.
- Hinüber, Oskar von. 2001. *Das ältere Mittelindisch im Überblick*. Wien : Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- 平田未季 2016 「コ系の意味の再分析—指示詞体系における新たな最小の意味的対立—」『国立国語研究所論集』10 : 19–39.
- Ja = Fausbøll, V. 1877–1896. *The Jātaka : Together with its Commentary, Being Tales of the Anterior Births of Gotama Buddha*. London : Trübner.
- 雲井昭善 1997 『パーリ語佛敎辞典』東京 : 山喜房佛書林.
- Levinson, Stephen C. 2004. “Deixis.” In Laurence R. Horn and Gregory Ward (eds.), *The Handbook of Pragmatics*, 97–121. Oxford : Blackwell.
- . 2018. “Introduction : Demonstratives : Patterns in Diversity.” In Stephen C. Levinson, Sarah Cutfield, Michael J. Dunn, N. J. Enfield, and Sérgio Meira (eds.), *Demonstratives in Cross-Linguistic Perspective*, 1–42. Cambridge : Cambridge University Press.
- M = Trenckner, V. and Robert Chalmers. 1888–2016. *The Majjhima-Nikāya*. 3 vols. London and Bristol : Pali Text Society.
- Majjhimaṇṇāsāṭṭikā (Be) = Vipassana Research Institute. 1998. *Majjhimaṇṇāsā-Ṭṭikā*. Igatpuri : Vipassana Research Institute.
- Malalasekera, G. P. 1937–1938. *Dictionary of Pāli Proper Names*. 2 vols. London : John Murray.
- 水野弘元 2005 『増補改訂パーリ語辞典』東京 : 春秋社.
- 村上真実、及川真介 2009 『パーリ仏敎辞典』東京 : 春秋社.
- Oberlies, Thomas. 2019. *Pāli Grammar : The Language of the Canonical Texts of Theravāda Buddhism*, 2 vols. Bristol : Pali Text Society.
- Ps = Woods, J. H., D. Kosambi, and I. B. Horner. 1922–1938. *Papañcasūdanī : Majjhimanikāyaṭṭhakathā of Buddhaghosācariya*. 5 vols. London : Pali Text Society.
- S = Feer, Léon. 1888–2008. *Samyutta-Nikāya*. 5 vols. London and Oxford : Pali Text Society.
- Sagāthāvaggāṭṭikā (Be) = Vipassana Research Institute. 1994. *Sagāthāvagga-Ṭṭikā*. Igatpuri : Vipassana Research Institute.
- 澤田 淳 2019 「指示詞研究の新展開—空間指示詞の類型論—」『語用論研究』21 : 161–186.
- Scheller, Meinrad. 1967. “Das mittelindische Enklitikum *se*.” *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der Indogermanischen Sprachen* 81 (1/2) : 1–53.
- Sidnell, Jack and N. J. Enfield. 2017. “Deixis and the Interactional Foundations of Reference.” In Yan Huang (ed.), *The Oxford Handbook of Pragmatics*, 217–239. Oxford : Ox-

ford University Press.

- Sn = Andersen, Dines and Helmer Smith. 1913. *The Sutta-Nipāta*. London : Pali Text Society.
- Spk = Woodward, F. L. 1929–1937. *Sārattha-ppakāsinī : Buddhaghosa's Commentary on the Saṃyutta-nikāya*. 3 vols. London : Pali Text Society.
- Sv = Davids, T. W. Rhys, J. Estlin Carpenter, and W. Stede. 1968–1971. *Sumaṅgala-vilāsinī, Buddhaghosa's Commentary on the Dīgha-nikāya*. 3 vols. London : Pali Text Society.
- Wilkins, David P. 1999. "Eliciting Contrastive Use of Demonstratives for Objects within Close Personal Space (all objects well within arm's reach)." In D. P. Wilkins (ed.), *Manual for the 1999 Field Season*, 25–28. Nijmegen : Max Planck Institute for Psycholinguistics.
- . 2018. "The Demonstrative Questionnaire : "THIS" and "THAT" in Comparative Perspective." In Stephen C. Levinson, Sarah Cutfield, Michael J. Dunn, N. J. Enfield, and Sérgio Meira (eds.), *Demonstratives in Cross-Linguistic Perspective*, 43–71. Cambridge : Cambridge University Press.
- Yamazaki, M. and Y. Ousaka. 2006. *Index to the Majjhima-nikāya*. Lancaster : Pali Text Society.

註

- 1 パリー語は中期インド・アーリヤ諸語に分類される。中期インド・アーリヤ諸語は古期インド・アーリヤ語に対して、ある程度の言語変化が進んだ諸言語である。古期インド・アーリヤ語は歴史的に古い文法を保つ言語で、ヴェーダ語とサンスクリット語が含まれる。
- 2 この他に、特定の格だけを残した指示詞として、単数・対格の *enaṃ* と単数／複数・処格の *tyamhi/tyāsu* がある。後者は限られた文献に数例のみ見つかるとはなれぬ形式である (Geiger 1916 : §107; Hinüber 2001 : §380; Oberlies 2019 : 39, 290; Cone 2001–2020 : s.v. *tya*)。 *enaṃ* の初頭母音をなくしたものが指示詞 *naṃ* であり、 *enaṃ* と *naṃ* はともに enclitic の指示詞である。 *enaṃ* の方が歴史的に古い形だが (古期インド・アーリヤ語の *ena-*に由来する)、パリー語では *naṃ* の方が広く使われ、単数・複数の対格・属格に語形変化する。 *enaṃ* から *naṃ* が作られたのは、指示詞 *etaṃ* と *taṃ* からの類推によるという見方がある (Scheller 1967 : 22 n.1, Hinüber 2001 : §389, Oberlies 2019 : 278 など)。しかし、類推のモデルにされる *etaṃ* と *taṃ* はそれぞれ別の意味を持つ指示詞であるのに対し、 *enaṃ* と *naṃ* は1つの指示詞のバリエーションと言える。また、 *etaṃ* と *taṃ* は clitic でないが、 *enaṃ* と *naṃ* は clitic である。つまり *etaṃ* と *taṃ* の関係は *enaṃ* と *naṃ* の関係と異なっているため、想定されているような類推が起こるとは考え難い。 enclitic であることを踏まえれば、むしろ、先立つ語の語末の母音とのつながりにおいて、初頭母音のないバリエーションが広まったのではないだろうか (S I 224 *abhiyaṃsv eva ne asurā*, M I 153 *na ca nesam jānāma āgatiṃ vā gatiṃ vā*)。 *enaṃ* の場合は先立つ語末の母音との連続が避けられるが (Sn 583d *kayira c' enaṃ* (< ca *enaṃ*) *vicakkaṇo*)、指示詞 *taṃ* が先立って一組で使われることの方が圧倒的に多い (D I 193 *tam enaṃ evaṃ vadeyyum*)。

- 3 韻文文献の中で *adum/amum* が現れるのは *Jātaka* だけだった。
- 4 *ayam* は *idam* の男性・単数・主格の形である。
- 5 日本語の辞書（雲井 1997, 水野 2005, 村上・及川 2009）では *idam* にコ、*etam* にコ・ソが当てられる。*adum/amum* に関しては辞書によってコ・ソ・アの違いがある。
- 6 これらの出現回数は、現場指示などの用法を区別せず、単純に索引（Yamazaki and Ousaka 2006）を使って数えたものである。
- 7 例文では指示詞をボールド体にした。和訳では、理解が日本語の指示詞に引かれるのを防ぐため、代表形をそのまま使っている。代表形に格助詞が付いている場合は指示代名詞（demonstrative pronoun）、格助詞のない場合は指示限定詞（demonstrative determiner）として、筆者が解釈したものである。その他、注目される語もボールド体で示した。現場指示以外の使われ方や本論文で扱わない指示詞はボールド体にせず、代表形も使っていない。
- 8 指示の動作の有無が指示詞の選択に関わることも観察されている（Levinson 2018: 32-33, Wilkins 2018: 66-71）。
- 9 (2) の注釈では話し手が自身の席をはたいて譲る様子が描かれている。Ps III 225 attano pana āsanā vutthāya taṃ āsanam papphoṭhetvā theram āsanena nimantento nisīdatu bhavam ānando, idam āsanam paññattan ti āha. 「自分の席から立ち上がって、その席をはたき、席を通して長老を招きながら『アーナンダ様は用意されてある *idam* 席にお座りください』と言っている」。
- 10 ラオ語は南西タイ諸語に属し、ラオス、タイ、カンボジアで話されている言語である（Enfield 2018: 72）。
- 11 Enfield (2003) の示した “here-space” の概念は、他の言語にも適用される（例えば日本語の指示詞に関して、平田 2016 や澤田 2019: 172-173 を参照）。
- 12 「そのような」と訳したのは指示詞 *taṃ* であり、文脈指示の前方照応と理解した。*taṃ* はこのように、しばしば他の指示詞とともに用いられる。
- 13 テキストの読み “*jānāvi*” は誤植と思われるため、訂正した。
- 14 テキストの読み “*middho*” は誤植と思われるため、訂正した。
- 15 副注は次のように説明している。Majjhimaṇṇāsaṭṭikā (Be) 46 *apaneyyam assa ahan ti assa dārakassa mukhato ahaṃ taṃ apaneyyam*. 「『私は *idam* の〔口から〕取り除きましょう』とは、私は *idam* 子供の口からそれを取り除きましょう」。
- 16 注釈によれば、この人物はその場にやって来た苦行者である（Spk I 298）。
- 17 注釈によれば、比丘は茎をつかんで傾け、遠くに立ってかいでいる（Spk I 298）。副注は「私は持っていかないし、壊していない」を「言い逃れ（*parihāra-*）」とする（Sagāthāvaggaṭṭikā (Be) 267）。また神格の位置に関して、ほぼ同じ内容を伝える *Jātaka* の話では、神格が木の幹の割れ目から注意している（Ja III 308 *rukkhakkhandhavivare thatvā*）。
- 18 注釈によれば、王がブツダの居場所を尋ねたのは、ブツダがどこにいるかわからないからではなく、慣習によるものである（Sv I 152）。また、この時の *etam* は指示の動作と言えるものを伴っている。Sv I 152 *yena bhagavā ten’ añjaliṃ paṇāmetvā eso*

- mahārājā ti ādim āha. 「世尊の方に両手のひらを向けて『大王よ、*etaṃ* が』をはじめとすることばを言っている」。
- 19 こうした使われ方を考慮すれば、距離の区別において *etaṃ* は近称というより、むしろ遠称と見なしうる指示詞だと思われる。
- 20 「かの」と訳したのは指示詞 *taṃ* である。注釈によると、これまでもしばしば師について話題になっていたことが読み取られる。なお、話し手の属する神々の世界には *idaṃ* が使われている。Ps II 304 *eso nu te, mārisa, so bhagavā satthā ti mārisa, tvaṃ kuhiṃ gato ’sī ti vutte, mayhaṃ satthu santikaṃ ti vadasi*; ***imasmim*** *devaloke ekapādakena viya tiṭṭhasi*; ***eso nu kho te, mārisa, so bhagavā satthā ti pucchimsu***. 「『同志よ、*etaṃ* がかの世尊、あなたの師ですか』というのは、『同志よ、あなたは「どこに行っているのですか」と言われると「私の師のそばにだ」と言います。あなたは ***idaṃ*** 神々の世界に片足でいるようです。同志よ、いったい ***etaṃ*** があなたの師、かの世尊ですか』と彼らは尋ねた」。
- 21 他にもしばしば、***idaṃ*** は発話／対話の場にはない指示対象に使われる。しかし、その多くは現場指示でなく、記憶指示や *recognitional use* (Himmelman 1996, Diessel 1999: 105–109 など) と呼ばれる用法だと考えられる。次の例は王に修行者を推薦する大臣の言葉である。指示対象の人物は対話の場にはないのだが、***idaṃ*** が使われている。ここでは話し手のみならず、聞き手も指示される人物のことをすでに知っている (テキストの p. 52 を参照)。D I 47 ***ayaṃ*** *deva pūraṇo kassapo saṃghī c’ eva gaṇī ca gaṇācariyo ca ... taṃ devo pūraṇaṃ kassapaṃ payirupāsatu, app eva nāma devassa pūraṇaṃ kassapaṃ payirupāsato cittaṃ pasīdeyyā* ti. 「王よ、***idaṃ*** プーラナ・カッサバはサンガを備え、集団を備え、集団の先生であり…。そのプーラナ・カッサバにお仕えください。きっと、プーラナ・カッサバにお仕えしている時、王の心は晴れましょう」。本論文は現場指示に焦点をさぼるため、記憶指示用法についてはこれ以上取り上げないでおく。
- 22 テキストの読み “*padhāvino*” は誤りと思われるため、訂正した (Cone 2001–2020: s.vv. *pathāvi* (*n*), *padhāvino*; M I 333 *pathāvino* も参照)。
- 23 他にも「遠くから (*dūrato*)」やって来る人物に ***idaṃ*** を使う例があるが、その多くは注 21 にあげた記憶指示用法と考えられる。一例として次の場面では、話し手が遠くからやって来る人物のことをすでに知っていることがわかる。D I 179 *addasā kho poṭṭhapādo paribbājako bhagavantaṃ dūrato va āgacchantaṃ, disvā sakaṃ parisam saṇṭhāpesi*: *appasaddā bhonto hontu, mā bhonto saddam akattha. ayaṃ samaṇo gotamo āgacchati, appasaddakāmo kho pana so āyasmā appasaddassa vaṇṇavādī, appeva nāma appasaddaṃ parisam veditvā upasaṃkamitabbaṃ maññeyyā* ti. 「遊行者のポッタパーダは世尊が遠くから (*dūrato*) やって来るのを見た。見てから、自分の団体を集めた。『皆さん、静かにしよう。音を立ててはいけない。***idaṃ*** 沙門ゴータマがやって来る。またその長寿なる者は静けさを好み、静けさを讃える人だ。団体が静かなのを知ってから、近づいてよいと考えるだろう』」。
- 24 テキストの読み “*vepulassa*” は誤植と思われるため、訂正した。

25 `adum/amum` がもっともよく使われる用法は前方照応なのだが、これについては別に論じる予定である。